

市民スポーツ先端領域の実態調査

～～困難だからこそ“逆境”が面白い～～

後藤新弥 [江戸川大学経営社会学科]

遠泳 トレラン ウルトラマラソン 社会人

調査研究の主旨

現在の日本では、市民スポーツ、特に個人が行っている活動実態がわかりにくい。スポーツマスコミは得てして「主催者と共同で制作できる」興行スポーツの番組報道に流れやすく、実際にはどのような人たちが、どのようなスポーツを、「プロや、専門的競技者」としてではなく「自分個人のレジャーとして」楽しんでいるかは、社会の側からはなかなか見えてこないのが実情だ。

そこで、あえて「特別な人たちがやっている」と誤解されがちな「先端領域」の市民スポーツ～海での遠泳や24時間ウルトラマラソン、山を駆け抜けるトレイルランニング～にターゲットを向け、これらのイベントや練習会などの現場で、江戸川大学経営社会学部スポーツビジネスコースの私のゼミを母体として参加者の実態調査を2009年から行ってきた。市民スポーツの実態を「見える化」することが目的である。

調査対象は①09年山岳ナイトラン（8月09日奥多摩＝山を走るトレラン練習会）②湘南オープンウォーター遠泳レース（8月29日湘南・江ノ島＝参加1000人の海での10KM遠泳）③ウルトラマラソン24時間（9月11～12日神宮外苑）④野田MTB耐久自転車レース（12月20日千葉県野田市郊外）など9イベントで、聞き取り調査などにより259人から回答を得た。

調査結果例

①平均年齢は40・7歳 過酷な運動のため、20～30代が主流と予測されたが、遠泳レース最高齢75歳を含め平均年齢が高く、こうした挑戦的なスポーツの主体は「ふつうの社会人」。年代別では男女とも40代が最多だった。

年齢(代)	10	20	30	40	50	60	70
人数	11	23	87	105	41	12	2

②男女比では女性の参加が19・9%だった

男性 81・1% 女性 19・9%

③今始まったばかりの「目新しいスポーツ」ではない。各スポーツ歴は平均6・4年だった。参加者は急増しているが、いわゆる「ニュースポーツ」とはいえない。

④スポーツが得意だったか という設問に対して、学校時代、実はスポーツが不得手だったという解答例が4割近くもあった。

スポーツが 得意だった 69・8% 不得手だった 37・2%

⑤また、それぞれの種目、もしくはそれに近い種目の「部活」を経験したかに対し、62%が「経験なし」と回答。五輪代表選手並の厳しい練習が必要なケースも多いスポーツだが、実態は「社会人になってから始めた」いわゆる“素人”が大半だった。

部活の経験が ある 62% ない 38%

⑥始めた動機を聞くと、仕事・家庭である程度の落ち着きが見られるようになってから「今の自分は自分らしくない」という本能的な“目覚め”が背景にあることも多いようだ。以下のような回答を得た。

設問：このようなスポーツを始めた「背景的な要因」は（いくつでも○を）	
メタボ、体重過多	37.4%
大きな病気や怪我	7.1%
学校（学生）時代の部活などに「思い残し」が	14.2%
出産	1.6%
その他	48.4%

特にメタボなど、「仕事関連での飲食で体調を崩しがちとなり、本来の自分はずっと健康的な人間ではなかったか」という意識が強い動機、特に継続の動機となっているようだ。

⑦週平均の練習時間は平均8.3時間。

⑧ちなみに設問月平均のスポーツに使う費用は **平均2万3000円**

予想通り、女子が2万8700円とやや高かった。男子は2万2200円だった。

⑨怪我や故障は約半数が「経験あり、または現在も」。しかし聞き取り調査では、多くがその現状をある意味でエンジョイしている印象が強かった。

怪我や故障は 経験あり 41% 今も 8% ない 51%

⑩では仕事への影響はどのようなのだろうか。「能率が上がった」人が4割近かった。多くのエネルギー、特に練習時間が要求されるだけでなく、まだイベントが限られているために地方へ出かけなければならない点が、こうした先端領域スポーツの難点でもある。仕事や学業への影響が懸念されたが、なんと4割近い人が「逆に上がった」と答えた。

能率が向上 35.7% 変わらない 57.9% 落ちた 6.4%

⑪高難度のスポーツに挑戦することは、各自の人生観やライフスタイルにどのような影響を与えるのかも興味の焦点だったが、「状況変化に対してタフになった」と答えた人が全体の7割もいた（複数回答）。スポーツによるリフレッシュ効果が鮮明になった。

設問：では、客観的に見て心の健康度、精神的な変化は？（いくつでも）	
物事に前向きに取り組むようになった、状況変化にタフになったなど	70.4%
変わらない	16.3%
疲労でイライラが多くなるなど、時にはマイナス面が目立つことも	5.7%
人生をプラスの局面から感じることができるようになった	35.5%

⑫困難だから面白い、高難度の挑戦だからこそ価値がある、と考える人が多かった。

なぜこのように辛く、苦しいことを継続しているのかという疑問に対して、「だからこそ励みになる」「困難だからこそ面白い」の回答が7割近かった。この「困難」の意味には、単なる競技中の体力・精神的な苦しさだけでなく、こうしたスポーツを継続する上での社会的・家庭的な障害をどう乗り越えるかが含まれている。高難度だからこそ

励みになる 65.0% なることもある 31.5% ない 6.4%

まとめ

以上のように、ごくふつうの社会人がさまざまなスポーツに取り組んでおり、その激しさや難しさを含めて、挑戦を自分のレジャー活動の軸に取り入れ、エンジョイしている。五輪招致やメダル倍化作戦をはじめ、頂点のスポーツばかりに力点が置かれ、「現実の市民スポーツ」が、社会から積み残された観もある。市民スポーツの実像実態への社会の理解の深まりと、市民のためのスポーツ政策の充実が待たれるところである。